

新日吉神宮（概要）

現在の新日吉神宮は、東山地区の緩やかな斜面にある、京都女子大学の向かいの狭い平地にあるが、もとは広大な法住寺の敷地の北東の角（鬼門）にあった。その目的は、宮殿や後白河上皇（1127-1192、在位 1155-1158）のために建てられた仏教寺院を悪霊から守ることにあった。この神社で崇拝されている神々は、後白河上皇が 1160 年に新しく建てた建物を守るために近江国（現在の滋賀県）の日吉山王大社から移したものである。それと同じ日に、熊野神社からは新日吉神宮付近の新熊野神社へと神々を勧請した。何度かの移転を繰り返した後、最終的に 1897 年に現在の場所に建てられた。

新日吉神宮は、天皇家と関わりを持つ仏教寺院である妙法院の庇護を長年にわたって受けていたが、19 世紀後半に新政府による神仏分離政策を受けてようやく真の意味で独立した神社となった。その後、1958 年にもともと神宮で祀られていた神々に加えて後白河上皇も崇拝の対象となり、新日吉神社は神宮の地位に格上げされた。神宮とは、古代の神社や皇族が崇拝対象とされている神社にのみ認められる呼称である。

かつては、神社の敷地は今日の京都駅周辺に広がる住宅にまで広がっていた。近代初期にかけて、何千人もの住人が年二回の神社の祭りに参加し、移動式の祭壇である神輿を担いで都の通りを行進していた。神社の大きな春の例祭である小五月会（こさきのまつり）の起源は、1169 年の後白河の行列にまで遡ることができる。祭りのお祝いには音楽の演奏、舞踊、無言劇が含まれており、これがのちの能の原型になったと考えられている。

本殿は 1835 年に優雅な流造りの様式で作られた。これは縁側の前部にまで伸びる非対称の切妻屋根が特徴である。